

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	平田 幸男
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 森広 浩一郎 副主査：（上越教育大学教授） 梅野 正信 委員：（岡山大学教授） 寺澤 孝文 委員：（鳴門教育大学教授） 佐古 秀一 委員：（岡山大学教授） 住野 好久
3. 論文題目 <p style="text-align: center;">関連性評定質的分析法による授業研究会の機能の分析に関する研究</p>	
4. 審査結果の要旨 <p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 平田幸男 氏から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>日時：平成28年2月21日（日） 14時00分～14時45分          場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室3</p> 1. 学位論文の構成と概要 (1) 論文の構成 序章 研究の目的と方法 第1章 授業研究会の議論における教師の指導の評価についての分析 第2章 授業研究会の議論を振り返った教師の思考の分析 第3章 授業研究会における指導教員の助言機能の分析 終章 本研究の結論と今後の課題 引用・参考文献一覧 資料 (2) 論文の概要 <p>本研究は、関連性評定質的分析法（以下、KH法）による分析結果を手がかりとして、授業に関する力量形成における授業研究会の機能について、とくにその構造に焦点を当て、明らかにすることを目的としている。</p> <p>校内授業研究は、授業に関する教員の力量形成に効果的とされるが、形骸化しているとも指摘されている。活性化に向けた取り組みもあるが、授業研究会がどのような構造で教員の力量形成に機能しているか、十分明らかにされているとまではいえない。そこで、個別の授業研究会を対象として、参加者に具体的な授業場面に基づく議論を促す、授業者に自分の課題について思考させる、指導的立場にある校外の教員から助言を得るという3つの機能に着目して分析した。分析する際に用いたKH法は、対象データが授業研究会1回分という単一の言語的資料であっても利</p>	

用可能であり、言語的資料をより適切に要約することを主眼としている本研究にとって有用性がある。

議論については、小学校における総合的な学習の時間の授業研究会での発言記録を分析した。その結果、発表の形式や方法以前に一番伝えたい内容を大切にしている限定性、これまでの学級経営とグループ編成に言及する連動性、授業者によって児童の話し合いが活性化された推移性の構造が確認された。議論内容の構造的把握からも、授業での指導力の向上を図る上でとくに評価すべき教員の指導について参加者が言及していたことを示せた。思考については、算数の授業研究会での議論を振り返った授業者の「語り」を分析した。その結果、授業での発問や児童の反応の引き出し方に関する反省が連動する連動性、授業における自身の課題と児童の姿、授業意図と授業展開という因果関係で言及が推移する推移性の構造が確認された。「語り」の構造的把握からも、議論での意見をもとにした新しい技術や授業の難しさの捉え直しについて授業者が思考していたことを示せた。助言については、算数の授業研究会において指導的立場にある校外の教員が授業研究会の最後の部分で総括的にまとめて指導助言した内容を分析した。その結果、「単元目標や単元における目指す子どもの姿をふまえて、本時の目標を設定する。そして、子どもの感性を重視しながら、授業展開のポイントや望ましい支援を考える」という連動性の構造と、それに基づく理想の授業と実際の授業を比較する対比性の構造が確認された。助言内容の構造的把握からも、この指導教員から授業構成の理論を参加者が提示されていたことを示せた。

以上のように、KH法による分析で事例を構造的に把握することからも、授業に関する力量形成における授業研究会の機能の一端を示せることを明らかにした。

## 2. 審査経過

授業に関する教員の力量形成に効果的とされる校内授業研究会に関するデータを、単一の言語資料のより適切な要約に主眼をおいた関連性評定質的分析法（KH法）を用いて分析している。対象データは、授業研究会における議論の発言記録、授業研究会を振り返った授業者の語り、授業研究会の最後になされた指導助言と多様であり、学校現場での教員自身による個別的で具体的な事例に対する活用に向けた検討としても一定の価値がある。

授業研究会は、授業者や参加者、学習の目的・内容・活動、教育方法や授業展開、校内授業研究会そのものの実施方法など関わる要因は多様であり、そもそも個別性が高いものである。KH法による分析で得られる構造というやや抽象度が高いものの抽出に焦点を当てることを試みたことにもよるが、具体的な授業や発言などの内容に細かく踏み込んだ分析を加えることで、より次の教育実践に結び付きやすい役立つ知見がさらに得られた可能性もある。

学校現場における将来的な活用については、校内授業研究会を分析するための方法としてだけではないことも考えられる。分析者が、客観的に自分を見つめ直すための視点を当てるものとして活用していけるのであれば、KH法の活用が教員の学習に繋がる発展性のある研究と認められた。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 平田幸男 氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。